

経済理論学会2015年大会 第18分科会
宇仁・中原論文へのコメント

コモンズの経済学が現代経済 学に貢献できることはなにか

塩沢由典
大阪市立大学名誉教授

2論文の結論

●宇仁論文

- コモンズの制度経済学は、古典派経済学を現代的に補足するものである。
- 古典派経済学(19世紀の古典派＋Sraffa以降)

●中原論文(3.「均衡からプロセスへ」の結論)

- 彼らの分析に欠けているものは、制度を数量体系と価格体系との機能的かつ調整的媒体として、とらえる視点である。
- 彼ら＝塩沢由典＋吉井哲

類似・対応は、整合を意味するか。

●宇仁: コモンズとRgの共通性

- 複数的・累積的因果連関(多重の因果連関)
- 複合的分析(2つの価値と3つの取引、5制度的諸形態)
- 制度・内生的変化の重視

vs. 古典派経済学

●中原: コモンズとRgの類似

- 政治・社会文化・経済的3重関係十有機的・複層的因果連関~Rgの5つの制度諸形態

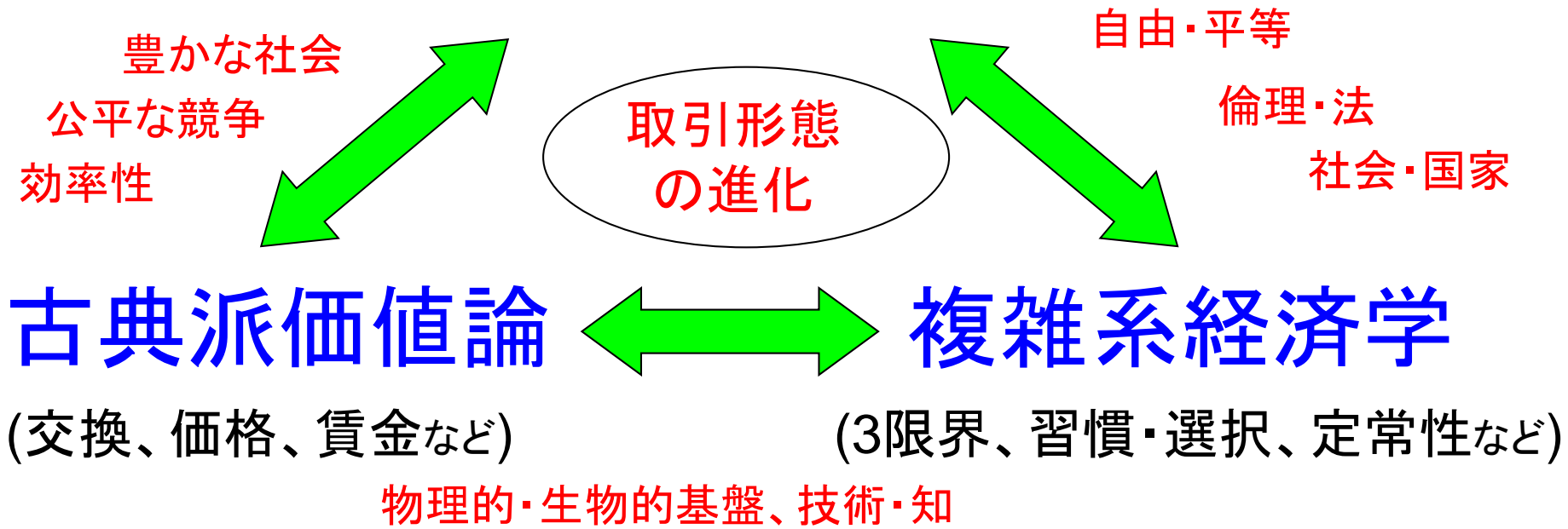
わたしの批判

- 理論の類似性は、理論の進歩にヒントになるか？
 - 足し合わせて、かけた部分を補う？
 - ますますルーズな分析体系になる可能性も
- C&Rg: 「ミクロ」の分析理論の欠如
- 諸形態への注目
 - 分類学(博物学): 学問的分析として初歩的なもの
 - 深い分析の欠如
- コモンズには、注目すべき点がある。
 - 宇仁・中原とは、捕らえ方が違う。

わたしの考える経済学体系(参考)

(7カテゴリーの進化、成長、定向進化、歴史など)

進化経済学



コモンズの経済学(1)参考にならない面

コモンズ『制度経済学』からの引用

- 古典派経済学理論は、...利害対立を有していなかった。なぜなら、古典派の単位は諸商品と諸個人であって、それらにおいては所有権が省かれていたからである。(p.92)
- スミスは、彼の後継者たちと同様に、経済理論から使用価値を排除して、経済科学は交換価値だけを扱わねばならないと考えた。(p.268)
- 最大の効率性は最小のマンアワーコストである。...(それは) 産出1単位あたりの最小支出である。(原著p.288、中原p.14)
- [リカード、マルクスにとって]市場は生産の全過程の一部であり、売買鋤床の家庭ではなかった。(原著p.364、宇仁p.7)

「経済学」から見れば、誤解・無理解満載。

コモンズの経済学(2) 読み方を変えれば

- なにが主題か：資本主義の法律的基础
 - Legal Foundation of Capitalism (1924)
- いわゆる「経済学」の本ではない。
 - 資本主義経済を支える法体系(Lock、Bentham)
 - 経済の運営必要な調停とその「理論」(法理)
 - Common Law: 法を作るのは判決・仲裁・調停
- Arbitrage 裁定(経済) vs. 仲裁・調停(法)
 - 「経済学」vs. 「法と経済学」(1925)

自由な経済はいかに維持されるのか

- 資本主義は、自由な交換取引からなる。
- 自由な社会・経済
 - 万人が自由であるにはすべての成員が他人の「自由」を承認する「自由の相互承認」が必要(ルソー、ヘーゲル←竹田青嗣)
- 「自由」の範囲をどう決めるか
 - Common Law(慣習、法、判例)
 - 立法としての仲裁・調停
 - 仲裁・調停の「原理」(公正な競争、交渉力)

Deweyの退けたもの(宇仁論文第2節)

● Plotinian Temptation

- 世界はいかなる単一原理にも還元不可能

● Galilean Purification

- 理想的な状況のもとに考察することを哲学の方穂として拒絶する。

● Asomatic Attitude

- 精神と肉体の二元論に立つ認識論

⊖ デカルトのCogito、カント、

調停・仲裁の論理

- 利害の調節に止まらない。
- (いまこの) 普遍性 ← 立法行為であるため
 - 多元的(矛盾する価値を並立させる)
 - デューイ: 人間とは、自らを取り囲む世界内での雑多な種類の相互作用への参加者である。... 日常的な経験が、相互関連の多様で、雑多な形式において、存在を明るみに出す。(Boisvert; 宇仁p.2)
- コモンズの「適正価値」もこの範囲のものとして解釈すべきでは？

宇仁・中原解釈への不満

- 自由経済(競争市場)に法的基盤は必要。
 - 「交換」「所有権」「契約」「公正な取引」「公正賃金」ほかの基本概念は、つねに境界が曖昧。
 - 不断の立法行為が必要。コモンズは、それを導く諸原理を追求したのでは？
- 範囲が明確でも「経済」は確定しない。
- 経済学の対象：この範囲内に起こること
- 「経済的なもの」vs. 「法的なもの」

デューイ哲学: 経済学の方法として?

● デューイの哲学的態度

- Plotinian T., Galilean P., Asomatic A.
- D.は科学を支持するが、哲学の方法として拒否
- 経済学は科学でなくてよいのか。

● 複雑系 (Wiever 1948, 塩沢『複雑系経済学入門』第5章)

- 単純さの問題(19cまでの科学、少数変数間の因果)
- 非組織的複雑さの問題(20c前半、統計・量子力学)
- 組織的複雑さの問題(20c後半、1970年代以降)

理論の統一と整合性

- M. Friedman(1951) 実証経済学の方法
 - 経済学の統一と整合性の追求を放棄
- Plotinusとわたし
 - P: 第一原理からすべてを導出(e.g デカルト)
 - S: 経験的事実から統一的な体系を目指す。
- 参考例: 現代物理学
 - 4つの力(重力、電磁気力、弱い力、強い力)
 - 統一(電弱理論)、大統一理論(強い力も)、しかし

結論: コモンズと経済学を統一できるか

- 両者はとうめん統一できそうにない。
- 経済学へのいくつかのヒント
 - 賃金率はいかにきまるか(労働市場の理論)
 - 経済政策論への寄与(自由で平等な経済社会を目指す法的基礎、法理・倫理)
 - しかし、狭義の「経済的なもの」の分析理論を欠いては、政策提言はポピュリズムに転落しかねない。
- 経済学の隣接領域として考えるべきこと:
 - 現在の「法と経済学」(Posnerなど)にどう対峙できるか。